



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	流動的農村労働者の社会・経済的位置とその意識 : 北海道の園芸・酪農地域を対象に〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	福澤, 萌
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(農学)
Dissertation Number	甲第13267号
Issue Date	2018-06-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71207
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Moe_Fukusawa_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学 位 論 文 内 容 の 要 旨

博士の専攻分野の名称： 博 士（農学）

氏名 福 澤 萌

学 位 論 文 題 名

流動的農村労働者の社会・経済的位置とその意識 -北海道の園芸・酪農地域を対象に-

日本全体の雇用・労働形態の変化によって労働の流動化が高まり、キャリアのやり直しと考えUターンやIターンとして農業（農村）の世界に飛び込む若者が全国的に増加している。しかし専業農家が農業人口の7割強を占める北海道では、農業での就業を目的に農村を目指す者は多いものの、生活可能な収入を得ながら農業に関わる方法は「自営就農」と「農業被雇用労働者」の2つに限定され、農業専業地帯特有の障壁が存在している。

本論文は、農業外から北海道へ農業での就業を目的に移住した移動性・不安定性・季節性を持つ農村の働き手「流動的農村労働者」を対象とし、現在の流動的農村労働者の実態を、労働主体の視点から明らかにした。労働者自身が年を重ねることで仕事と生活のバランスが変化する生活者だという前提に立ち、職場の経済的位置（①給料・手当、②仕事内容）、社会的位置（①仕事のやりがい、②生活環境、人との関わり方）の2つに関して年代別で整理した。

序章ではこれまでの農業雇用労働力研究（今井（1994）、岩崎（1997）、今野（2015））、そして研究での核となる労働者自身の「仕事を選択する基準」についての既存研究（太田・橘木（2015）、島田・清家（1992））を整理した。そこから、本論文での分析視角を、流動的農村労働者の職場を、経済的位置（①給料・手当、②仕事内容）と、社会的位置（①仕事のやりがい、②生活環境、人との関わり方）の2つについて客観的「位置」を整理した上で、各主体のその「位置」の認識、意識を明らかにすることとした。

第1章では、流動的農村労働者の社会・経済的位置とその意識を分析するに先立ち、北海道における園芸・酪農地帯での労働の特徴について既存研究、統計資料をもとに整理した。園芸野菜作産地は、「雇用依存型家族経営」として形成され、労働力導入を必要とする栽培管理・選別調整作業等、地域における労働力の調達また品質管理を農協が中心となり地域農業の組織化を進めた。

一方の酪農地帯は、根釧・天北地域の草地型酪農と、十勝網走地域の畑地酪農共に専業化の進行、飼養頭数の拡大、それに伴う労働時間の上昇を招いていること、規模拡大・専業化の進行により、酪農を支援する支援組織が拡大していることを明らかにした。

第2章、第3章で取り上げる農作業ヘルパー事業は、富良野地域で多品目野菜を生産する農家にとって重要な夏の農業雇用労働力を、ふらの農協が主体となって日本全国から募集・調整を行う事業である。第2章では、富良野地域の雇用労働力の地域的需給動向を明らかに、さらに農作業ヘルパー事業の事業概要を整理した。農作業ヘルパーの大半は農業経験年数が短く作業熟練度に差があるため、単純作業を行う労働力として位置付けられ、作業内容は農協で取り扱う青果物の収穫・管理作業全般を担っている。時給900円の8時間労働（社会保険完備、2年目以降の熟練手当あり）で、4週4休程度、全員が寮生活を行っており、3食寮の食事である。

第3章は流動的農村労働者の就業動機を軸としながら、経済的位置や仕事へのやりがいなどの社会的位置とその意識を明らかにした。就業動機は、①農業志向型、②賃金重視型、③地域・農業経験重視型、④偶発的就業型の4グループに分けられ、これまでのリゾートバイトとしての短期就業以外にも、農業体験の入り口や農業を職業とするための一つのステップ、富良野地域へ居住を考えて就業する者も居ることが明らかとなった。

経済的位置への意識について、賃金体系に対しては、手当の充実に満足しながら、天気によって左右される月ごとの収入の差、就業者が負担する経費を抑える余力がないことへの不満を示した。ま

た農作業に対しては、ハウス内作業での暑さに対しては、苦痛ではあるが、それ以上に収穫作業の価値を感じる内容であった。

農家・寮生活・農協職員との人間関係に対しては、会った相手に多大に影響を受けるが、気が合う農家に行くために翌年就業した者も居た。働き方の理想は、就業者によって異なるが、短期雇用を強みにとった者も居た。

第4章は酪農ヘルパー組織の概要について整理を行った。酪農ヘルパー組織は周年拘束性が高い酪農家の休日確保の支援組織として、1990年以降に設立された組織である。特定多数の牧場を顧客としているため、牧場ごとのレイアウト、作業の順番や搾乳方法の違い、飼い方のこだわりなど多様な酪農家情報を持ち合わせている組織でもある。また酪農ヘルパーは、就農希望の若者や酪農に興味がある者、そして農家子弟が就農までの期間に経験を積むことを目的として就業する者が中心であった。

第5章では、こうした酪農ヘルパー組織の職員を対象に就業時の社会・経済的意向と就業してからの意向に対しての価値観の変化を示し、今後も継続可能かという視点で分析した。

酪農家の休日確保の要望の高まりから、酪農ヘルパーへの必要性が増し、賃金や保障は整いつつある。しかし酪農ヘルパー不足の深刻化が、酪農ヘルパー自身の休日不足を招いている。仕事内容は、酪農技術を習得するまでの研修制度が整いつつあるものの、実施出来ているのは「十分な」時間がある酪農ヘルパー組織でのみであった。

酪農ヘルパーの社会的位置に対しては、酪農家と職場との関係を構築できている者が継続可能と言える。酪農技術も地域的縁も無い状況での就業では、仲間を見つけられず孤立し、退職という例も聞かれた。また早朝と晩が仕事で日中が自由の職種なため、他職種の人との交流に制限がかかり、この点でも孤立しやすい。また就業時間が変則的で生活リズムを崩しやすい職業でもある。また酪農飼養の能力が養われるもののその能力を発揮する場がなく、仕事へのやりがい失う者もいる。

終章では、とりあげた事例を序章で設定した分析視角である「流動的農村労働者の社会・経済的位置とその意識」について各事例の客観的事実とその事実に対する当事者の意識を整理した。

農作業ヘルパーは不安定な経済的位置にあるが、社会的位置としては、就業動機との関係からそれに対する意識は異なっている。短期間の雇用による給与を獲得したいという動機に基づく場合は、その評価は高くはないが、一方で、農業、農村に対する動機を持つものについては、やりがいや農作業に対する評価は高くなっている。しかし同時にそうしたやりがいなどの意識は、農家との関係性や受入機関である農協との関係性によって、影響を受けることも明らかとなった。それは農村・農業側が、短期的雇用労働に対して、彼女らが社会的位置に高い意識（やりがい）を持っていることへの認識の低さが影響していると考えられる。

一方の酪農ヘルパーは、経済的位置は決して低くはないが、人材が集まらない、離職率が高いという現実がある。今回の調査からは酪農ヘルパーにおいて、経済的な位置づけよりも、社会的な位置づけがより強く意識され、そのことが就業の継続に大きく影響を与えていることが明らかとなった。仕事でのやりがい、地域でのつながりというものが、働く側にとって重要な要素として認識されている。

本論文は、労働力を必要とする農業側からではなく、不安定・低賃金である環境にあえて選択してきた労働者の視点からその社会・経済的位置と評価を明らかにした。それによって北海道農村で働き、生活する意味について、示唆を与えることができたと思う。